

4-5 社会との交流

4-5-1 自然科学研究機構シンポジウム

自然科学研究機構シンポジウムは、著名なジャーナリストであり本機構の経営協議会委員でもある立花隆氏によって提案・コーディネートされ、下記のようにこれまでに計8回開催されている。

第1回：「見えてきた！ 宇宙の謎。生命の謎。脳の謎。科学者が語る科学最前線」，サンケイプラザ（東京都千代田区），2006年3月21日。

第2回：「爆発する光科学の世界——量子から生命体まで——」，東京国際フォーラム（東京都千代田区），2006年9月24日。

第3回：「宇宙の核融合・地上の核融合」，東京国際フォーラム，2007年3月21日。

第4回：「生命の生存戦略 われわれ地球生命ファミリーはいかにしてここにかくあるのか」，東京国際フォーラム，2007年9月23日。

第5回：「解き明かされる脳の不思議」，東京国際フォーラム，2008年3月20日。

第6回：「宇宙究極の謎」，東京国際フォーラム，2008年9月23日。

第7回：「科学的発見とは何か 「泥沼」から突然「見晴らし台へ」」，東京国際フォーラム，2009年3月20日。

第8回：「脳が諸学を生み，諸学が脳を統合する」，学術総合センター橋記念講堂，2009年9月23日。

本シンポジウムは、自然科学研究機構が国内最高水準の学術的アクティビティーを有しながら一般にはほとんど知られていないという現状を残念がられた立花氏が、コーディネーターとして自ら進んで計画されたものである。氏は、東京大学教養学部で担当されているゼミナールの受講生とともに事前に講演者に取材を行い、最先端の研究内容をいかに面白く、かつ、分かり易く伝えるかについて、貴重なご助言をされてきている。

本シンポジウムに対して、分子科学研究所は以下のような様々な企画で積極的に関与してきている。まず、第1回において、「21世紀はイメージング・サイエンスの時代」と銘打ったパネルディスカッション中で、岡本裕巳教授が「ナノの世界まで光で見えてしまう近接場光学」というタイトルで講演を行った。第2回目は、講演会全体の企画を分子科学研究所が中心となって行った。全講演のうちの半数を分子研のスタッフ（松本吉泰教授，平等拓範准教授，加藤政博教授，大森賢治教授，江東林准教授）が担当し，中村宏樹所長が閉会の挨拶で締めくくった（詳細は分子研レポート2006を参照）。なお，本講演会の収録集が，2007年度10月に（株）クバプロより出版された。さらに第7回では，加藤晃一教授が自らの体験に基づいて「研究の醍醐味とは何か」を伝える講演を行った。

また，本シンポジウムでは，講演会の開催と併せて，展示コーナーを設けてビデオやパネルを用いた説明を行ってきている。短い休憩時間をぬって展示スペースを訪れ熱心に質問をされる参加者の方々も多く，「研究の面白さ」を伝える試みが一定の成果を挙げていることが実感される。特に，第6回以降は，新規に作成した分子研の紹介ビデオを放映している効果もあり，以前にも増して多数の方々より様々な質問を頂くようになった。

4-5-2 分子科学フォーラム

分子科学研究所では『分子研コロキウム』という名前で所員に向けた分子科学のセミナーを開催し，2009年12月で821回目を終った。これとは別に，分子科学の内容を他の分野の方々や一般市民にも知らせ，また分子研コロキウムよりはもう少し幅広い科学の話分子研の研究者が聞き，自分の研究の展開に資するようになることを目的としたセミナーも有益であろうという考えの下に，豊田理化学研究所の協力を得て開催するに到ったのが『分子科学フォーラム』である。豊田理化学研究所の理事を長年つとめておられる井口洋夫先生の紹介によりこれが実現し，年度毎に年間計画を前年度末に豊田理化学研究所の理事会に提出し，承諾を得てから実施している。第1回は1996年9月に

シカゴ大学教授の岡 武史先生，第 2 回は同年 10 月に生理学研究所名誉教授の江橋節郎先生に講演をお願いし，現在までに 82 回開催されている。

その後『分子科学フォーラム』は，分子科学の内容を他の分野の方々や一般市民に紹介し，また，分子研内の研究者がより広範な科学の内容に触れる場を提供してきたが，2008 年度より一般市民の方々に科学の面白さ・楽しさを広める「市民一般公開講座」として新たに位置づけた。2009 年度は広報・アウトリーチ活動の重要性が益々増大している現状に鑑み，一元的で効率的な活動の展開を目指して，広報室を中心とした実施体制の整備を進めた。また講演回数をこれまでの年 6 回から年 4 回に変更し，密度の高い講座を開講することで，より魅力的な『分子科学フォーラム』の実現を図った。

回	開催日	テーマ	講演者
79	2009. 1.21	たんぱく質のかたちができる仕組みを探る	桑島 邦博 (岡崎総合バイオサイエンスセンター教授)
80	2009. 3.11	星はすばる，銀河も統(すば)る	児玉 忠恭 (国立天文台光赤外研究部准教授)
81	2009. 5.13	水と緑の国，日本 ～地球環境と日本の農・林・漁業～	富山 和子 (日本福祉大学教授)
82	2009. 7. 8	女性の美を極める： 分子からデザインする化粧品	東久保和雄 (資生堂リサーチセンター)
83	2010. 2.17	低炭素社会に機能性炭素が役に立つ： 次世代電池開発とナノサイエンス	西 信之 (分子科学研究所教授)
84	2010. 3.16	プラズマと核融合	伊藤 公孝 (核融合科学研究所教授)

4-5-3 岡崎市民大学講座

岡崎市教育委員会が，生涯学習の一環として岡崎市民(定員 1,500 人)を対象として開講するもので，岡崎 3 機関の研究所が持ち回りで担当している。

分子科学研究所が担当して行ったものは以下のとおりである。

開催年度	講師	テーマ
1975 年度	赤松 秀雄	化学と文明
1976 年度	井口 洋夫	分子の科学
1980 年度	廣田 榮治	分子・その形とふるまい
1981 年度	諸熊 奎治	くらしの中のコンピュータ
1982 年度	長倉 三郎	分子の世界
1983 年度	岩村 秀	物の性質は何でできるか
1987 年度	齋藤 一夫	生活を変える新材料
1988 年度	井口 洋夫	分子の世界
1991 年度	吉原経太郎	光とくらし
1994 年度	伊藤 光男	分子の動き
1997 年度	齋藤 修二	分子で宇宙を見る
2000 年度	茅 幸二	原子・分子から生命体までの科学

2003 年度	北川 禎三	からだで活躍する金属イオン
2006 年度	中村 宏樹	分子の科学, 独創性, そして東洋哲学
2009 年度	平田 文男	生命活動における『水』の働き

4-5-4 その他

(1) 安城市民公開講座等

安城市教育委員会が、生涯学習の一環として安城市民（公開講座は、一般市民約 100 名、シルバーカレッジ（2 年間）は、熟年者約 50 名）を対象として開講しているもので、岡崎 3 機関の研究所が協力して、講師を派遣している。

分子科学研究所が担当して行ったものは、以下のとおりである。

安城市民公開講座

開催日	テーマ等	講師
2002. 8.10	ナノテクノロジーの話	畠田 博一 助教授
2003. 7.19	レーザー入門～光の基礎からレーザー研究の最前線まで～	平等 拓範 助教授

安城市シルバーカレッジ

開催日	テーマ等	講師
2002. 6. 6	鏡に写った分子の話	魚住 泰広 教授
2003. 6. 5	分子の振動を観測して蛋白質のメカニズムを明らかにする	北川 禎三 教授
2004. 7. 6	原子のさざ波と不思議な量子的世界	大森 賢治 教授
2005. 9. 9	動物の進化	宇理須恆雄 教授

(2) 岡崎商工会議所（岡崎ものづくり推進協議会）との連携

岡崎商工会議所は産学官連携活動を通じて地元製造業の活性化と競争力向上を目的に「岡崎ものづくり推進協議会」を設立し、多くの事業を行っている。この協議会と自然科学研究機構岡崎 3 研究所との連携事業の一環で、会員である市内の中小企業との交流会を、平成 19 年度から行っている。これらは主に技術課の機器開発班と電子機器・ガラス機器開発班が中心となって対応している。交流会では、市内の中小企業から 10 社ほど来所し、各社の持っている得意分野の技術紹介を受けた後、分子科学の分野で必要なものづくり技術や、技術開発の取り組みについて説明し、意見交換を行った。平成 21 年度は交流会の開催は行わなかったが、この交流会を機にスタートした協力体制は継続して進んでいる。

(3) コミュニティサテライトオフィス講演会

岡崎大学懇話会（市内 4 大学で構成）・岡崎商工会議所が運営するコミュニティサテライトオフィスにおいて、地域社会や地域産業の活性化に還元する主旨で一般市民及び企業関係者を対象としている。

開催日	テーマ	講師
2009. 1.15	分子を活用する近未来技術～分子科学研究所が関与するエネルギー問題や環境問題等への取り組み～	西 信之 教授
2010. 1.19	次世代の太陽電池について	平本 昌宏 教授